

環境・景観とツーリズム

地域地理学の視点

石原 照 敏

はじめに

1960年代から70年代初めまでの高度成長は大量生産・大量消費によって、あまりにも多くの資源を消費し、あまりにも多くのゴミを排出した。これでは地球の資源が枯渇し、人間が地球上で生活し、生き延びていくことができないのではないかという危機感から、1973年にストックホルムで開催された国連人間環境会議以降、環境問題が真剣に討議されるようになった。

地理学がギリシャ時代から人間と環境の問題に関心を抱いていたことは一般にはあまり知られていない。前述したように、環境問題が深刻になるにつれて、環境の社会科学的側面については、地理学のみならず、社会学、地域経済学、農業経済学など多くの科学が関心を示すようになったが、地理学は環境をどのように考察すべきなのであろうか。

また、景観に関する新しい思想は、北方ルネサンス文化の中で生じ、フンボルトにおける近代地理学の誕生はこのような伝統を発展させるものであったという¹⁾。環境問題の発生とも関連して、環境の視覚的側面である景観についても、その保護が重視されるようになった。

地理学、とりわけ地域地理学は、環境とその視覚的側面である景観が、人間の組織化された活動により、地域特性を呈して、何故、そこに形成されてくるか、つまり、特定の地域における人間と環境・景観との因果関係を認識する。そこに、地域地理学の視点があるというのが筆者の考え方である。

そこで、このような視点を念頭において、

2001年8月18日から9月11日までの間に行われた阪南大学国際コミュニケーション学部国際観光学科海外研修（メルボルン・コース）のエクスカッション（8月19日と8月28日）と同勤務時間終了後、筆者が独自に行った調査（8月27日、8月29日、9月4日）で観察・収集したデータに基づいて、環境・景観とツーリズムについて地域地理学的に考察する。

環境とツーリズム 地域地理学の視点

アラン・リビエツALain Lipietz（フランス緑の党の全国スポークスマン、経済地理学を対象とした著作もある²⁾）によると、ギリシャ語のオイコスOikosは「支配地」を意味するが、このオイコスからエコロジーEcology（生態学）とエコノミーEconomy（経済学）という関連する二つの言葉が生まれるという³⁾。

さらに、アラン・リビエツによると、科学的エコロジーあるいは自然生態学は種の個体とその組織化された活動と活動をとりまく環境という三つの関係についての科学である。種の個体とその組織化された活動の中心には食物循環があり、これが生態系エコシステムEcosystemといわれる。生態環境は、このような活動の産物であると同時に、その条件であり、従って、種が生き延びるための条件でもある。つまり、両者はトライアングルのようにつながっているというのである⁴⁾。このような生態系と生態環境は人類にとっては自然環境を構成していることになる。

地域地理学は生態系と生態環境の地域特性を

把握しなければならない。そこで、次に、このような生態系と生態環境の地域特性について、オーストラリア・フィリップ島のペンギンの場合を事例として考察してみよう。

フィリップ島は、図1のように、直線距離で、メルボルンの南東約80km（道路距離で約120-130km）のところにある。メルボルンを出発して、フィリップ島に向かう途中には見渡す限り草原が広がり、乳牛や肉牛が放牧されている（日本の場合とは異なり、牛はつねに野外で放牧される。牧草の大規模経営で飼育される乳牛によって生産される牛乳は市中で1ℓ1.5A\$で販売されており、日本の場合の半値）。

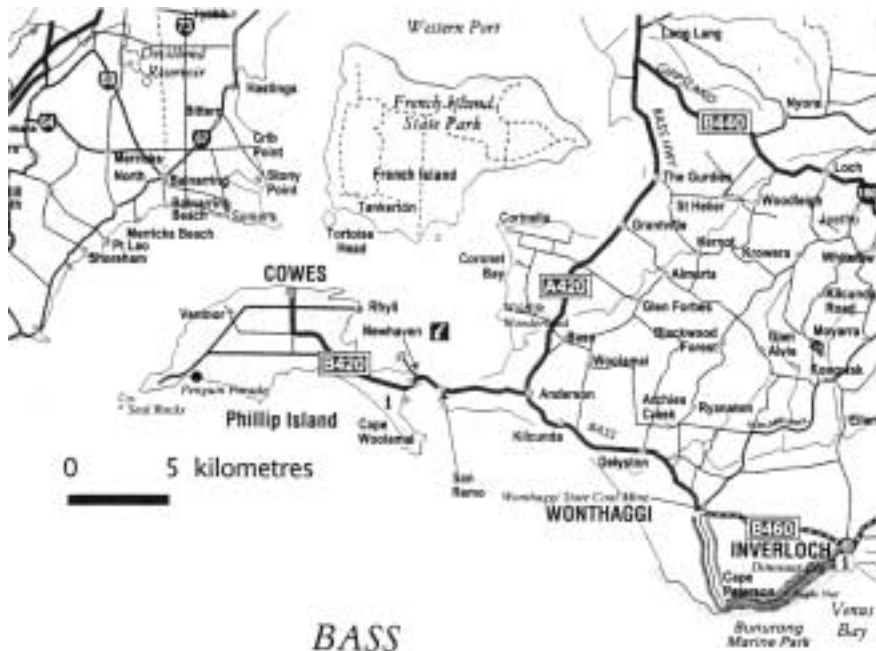
フィリップ島は、東西約20km、南北約10km、面積約100km²くらいの小さな島である（図1）。イギリスから1500人くらいの人々がシドニー・コープに上陸した1788年から10年後の1798年に、ジョージ・バスGeorge Bassという人がフィリップ島を発見したとされている。最初、Snapper Island、それからGrant Islandと名付け

られたが、最終的には最初の統治者Captain Arthur Phillipにちなんで、フィリップ島と名付けられた⁵⁾。

1839年に、英陸軍中尉Colonel James McHaffieという人がこの島を羊の放牧場として利用する権利を得た。1865年にはこの島の調査がなされ、いろいろな形で選択的利用がなされるようになってきた。フィリップ島で最初に栽培された植物の代表はチコリである。最初のチコリ炉が1870年にJohn and Solomon Westによって建設された。1930年代の不況の間、チコリはフィリップ島の主な産業の一つであった。チコリはコーヒーの添加物として利用された。その根をくま手で掘って洗い、さらにスライスしたものが炉で焼かれた。労働コストが高つくのと、チコリの需要が減少したのとで、第2次大戦後、チコリ農業は衰退した。それでも今日、島のあちこちに古風で趣のあるチコリ炉がみられる⁶⁾。

1920年代の後半に、ツーリズムがブームとなった。ペンギンのコロニー Colony への接近路

図1 フィリップ島



資料) Phillip Island Information Centre, Phillip Island & Surrounds, 2001, p. 30.

が建設されたからである。島の西南部のサマーランド湾（Summerland Bay）における「ペンギン・パレード」（図1）は毎年50万人の観光客をむかえている。毎夕、薄暗がりの中で観光客は世界最小のペンギンが水際に小さなグループになって集まり、それから砂浜を横切って砂丘の灌木の茂みの下にある彼等の隠れ穴（巣）に入るのを見物するのである⁷⁾。しかし、これだけなら、単なる興味本位に終わりがかねない。

そこで、次にペンギンのエコ・ツーリズムを地域地理学の視点で考察してみよう。フィリップ島のペンギンは、フェアリー・ペンギン Fairy Penguin とよばれ、世界（ただし、ペンギンは南半球にしかいない）17種のペンギンの中で最も小さいものである。身長33cm、体重1-2kgにすぎない。

ペンギンの生態の地域特性は、ペンギンにナンバー・プレートをとりつけて移動を調査したり、送信機をとりつけて飼育状況を調査することによって、かなり明らかにされている。ペンギンの生態環境は海と砂浜である。

ペンギンは海で餌を求める。ペンギンは流線形の母体と水かきのある足をもっていて、水深10mくらいのところまでもぐって、かたくちいわし、まいわし、やりいかなどの小さな魚を餌として生きている。逆に、ペンギンは海では、あざらしやさめの餌食になる危険性がある。ペンギンは体を維持するために毎日240グラムの魚を食べる必要があるという。海では小魚-ペンギン-さめまたはあざらしの生態系エコシステムができあがっていることになる。この生態系がうまく機能していれば問題がないわけであるが、最近、小魚が減少して、ペンギンの餌がなくなり、その結果、ペンギンもやや減少気味であることが問題になっている。つまり、生態系に支障をきたしていはいはしないかということである。ペンギンはフィリップ島とタスマニア島との間のバス海峡で餌を求めているわけであるから、この海域で問題が起こっていることが推定されるが、この海域でペンギンの生態系に支障をきたした原因については明らかではない。

ともあれ、まだペンギンの生態系が大きく破壊されていないことが救いであろう。

ペンギンはとりわけ繁殖と羽毛がえのために、砂浜に帰ってくる。ペンギンの子は生まれて最初の年の大部分の間は海で過ごす。約1歳になると、ペンギンは羽毛がえのために生まれたコロニーに帰ってくる。生まれてから2年目の終わりに、初めて連れ合いとともに、つねに生まれたコロニーに滞在する。

繁殖期は、通例は雌が騒がしく雄に言い寄る9月に始まる。ペンギンは一つの繁殖期に1羽のパートナーをもつだけである。1羽のペンギンが、通例、二つの卵を産む。約35日間、両親によって分担して抱卵がなされ、母親だけが抱卵することはないのが興味深い。ひなが生まれると最初の2週間、両親のどちらか一方によって継続的に子育てがなされる。他の一方の親は日中は海で過ごし、夕方になると一部消化した餌をもって、ひなと他方の親に餌を与えるために帰ってくる。15日後、ペンギンの両親が海にいき、ひなは両親が帰ってくるのを砂浜の隠れ穴で待っている。ペンギンの通常の生存期間は約7年である。

いわゆる「ペンギン・パレード」は上述したように、繁殖の期間中と羽毛がえのために、生まれたコロニーに帰ってくるペンギンの行動である。われわれの観察によると夕暮れ時、サマーランド湾岸の砂浜に、ペンギンの第1団（数羽）が波間から現れてきた。砂浜には十数羽のカモメが、ペンギンの一部消化した餌をねらって集まってくる。ペンギンはよちよち歩いて、隠れ穴にむかう。また、ペンギンの第2団が、波間に現れたり、沈んだりしながら、砂浜に上陸し、隠れ穴によちよち歩いてたどりつく。中には、カモメに追いかけて、再び海に避難し、第3団とともに帰ってくるものもいる。決して1羽だけ帰ってくるのではなく、数羽一緒に帰ってくるというのは外敵から身を守っているのである。よちよち歩くペンギンの姿はいかに可愛い。その姿をみるために観光客はやってくる。しかし、陸上でも、犬やきつねにね

らわれている。そこで、サマーランド湾のペンギン保護区に犬やきつねが入ることは規制されている。また、ビデオ・カメラを含めて、カメラによる撮影はフラッシュによりペンギンの眼がつぶれる恐れがあるので禁止されている。ペンギンの保護は、フィリッパ島自然保護委員会によってなされており、その経費は「ペンギン・パレード」からの収入でまかなわれている。従って、砂丘の茂みとその下にあるペンギンの隠れ穴におけるペンギンの生態環境は良好な状態に保護されており、ペンギンの再生産が可能になっている。

以上のように、ペンギンの地域生態（生態系と生態環境）はかなり明らかになったとはいえ、まだ、問題は残されている。南半球にしか生息していないペンギンのうち、フェアリー・ペンギンが何故、フィリッパ島のサマーランドに住みついているのか、地域地理学は、この地域で何故そうなのかまで問わねば十分ではない。そのことによって、ペンギンの生き残りのための条件（生態環境）が十分に明らかにされたといえるであろう。しかし、このことはまだ研究し尽くされていないといわれている。

景観とツーリズム 地域地理学の視点

リピエツによると、景観とは次のように定義される。景観 Paysage の中には国 Pays があり、たいてい国の民（農民） Paysan と固有の顔貌 Visage が含まれている。それゆえ、景観はわれわれの視線の下でわれわれに向き合う、人間労働の表現としての領域 Territoires である。そして、国、国の民、顔貌という三つの用語は、環境に関するエコロジストの見方から景観を定義づけるものである⁸⁾。

これは語源からみたユニークな考え方ではあるが、「景観は……人間労働の表現としての領域である」という規定には問題がある。たしかに「エコロジストとして、人間の活動を考察しようとするならば少なくともヨーロッパではほとん

ど人に住まれ、整備されている領域、つまり景観に視線を据えることになる」としても、「人間労働の表現としての領域」ではない自然景観も、やはり世界には存在するのではなからうか。景観とは人間労働の表現としての領域であろうと、人間労働の加わっていない自然であろうと、Visible な事物であり、環境との関連で景観を定義すれば景観とは環境の Visible な側面である。従って、景観については、美的、倫理的にどうかということが問題となる。それゆえ、「見つめた後で、愛撫し、熱い口づけまでするような愛情と敬意に満ちた関係を景観に対してもつならば傷つけることなく景観に接することができる」「景観を変える必要があると判断するとき、われわれは多様性を尊重しつつ、それを転換することについて交渉を重ねながら、景観と共に生きることや景観を生かすことを学んでいかなければならない⁹⁾」という考え方は理解し得るものである。

人間と景観との共生は、うるおいのある人間生活（生活の質的向上）のために必要なものである。景観のあり方は地域的に異なる。地域地理学は景観の地域特性にかかわるものである。そこで、次に、オーストラリア・メルボルンの庭園を事例として、景観を地域地理学的に考察してみよう。

メルボルンには図2のように、庭園が市街地に接してつくられており、郊外を含めたメルボルン地域には大小450以上の庭園（約700ha）がある。その結果、人びとが美しい景観をみながら、リラックスし、生気をとりもどすために好都合であり、人間と景観との共生が可能になっているものといえる。それでは、このような庭園はどのようにして形成されてきたのであろうか。代表的な三つの庭園を事例として考察してみよう。

1. 王立植物園 Royal Botanic Gardens

1846年に設立されたもので、面積36haに達する。この植物園は図2のようにヤラ川の左岸に立地しており、美しいオープンな芝生と世界中

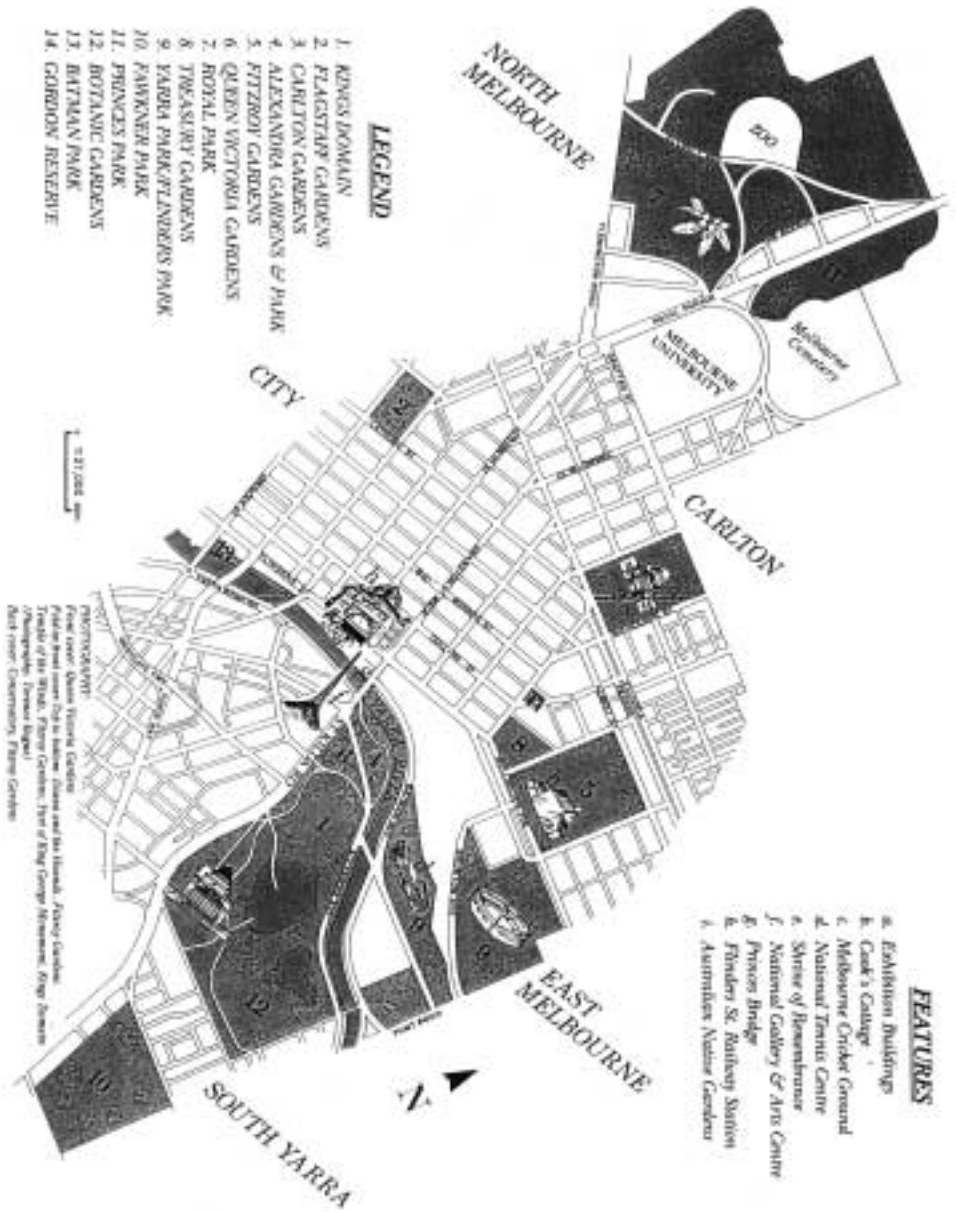


図2 メルボルンの庭園

資料) Lord J. (ed), *The Gardens of the City of Melbourne* The City of Melbourne, 1993.

からの約12000種の植物の展示で名声を博している。この植物園の立地は場所として最初は、スペンサー・ストリート鉄道駅に近接した50エーカー（20.25ha）が提案された。他にもさまざまな場所が提案されたが、初代の植民地政府監督官（後の副総督）Charles Joseph La Trobeの識別力と趣味によって1845年に現在の位置が選定された。

1843年9月に、医師NicholsonがBotanic Gardensを直ちに設立するよう懇願する嘆願書（約400人が署名）を提出したことを契機として、1845年には植物園のために、植民地政府によって総額750ポンドの予算が決定された。1846年3月に任命された、初代の管理者John Arthurが5エーカーの小牧場（競馬場の引馬場）にフェンスをめぐらした。1851年の終わりには多くの種類のエキゾチックな植物がコレクションに加えられた。その時、園芸協会（1849年に、John Pascoe Fawknerによって創設された）のさまざまな展覧会が開催された。

1857年に、植物学者Ferdinand von Mueller（後にBaron Ferdinand von Muellerとなる。以下Von Muellerと表記する。）が植物園の支配人に任命された。Von MuellerはフランスのTrianonの王立植物園Royal Gardensをモデルにし、科学的基礎にもとづいて、科学者にとって大きな価値のある植物園をつくる事業に着手した。彼は、土地固有の木々とか異国情の木々とか、低木や草類など数千種を植えたという。

支配人は1873年に、Von MuellerからWilliam Guilfoyleにかわった。Guilfoyleは、人びとに近づきやすい公共植物園をめざした。そこで、大きな木を配置しなおし、ひめかもぐさやバッファロー・グラスを植えて芝生のまわりをめぐる広い通路をつくった。古い水路は異国情の木々の保護的な天蓋の下に植えられたしだ類の峡谷に変えられた。

Guilfoyleの最も顕著な業績は、装飾的な湖の築造であった。1897年と1901年の間に、以前の瀉を湖にかえて、ヤラ川の水をひき、島やみさきが築造された。その際、曲流していたヤラ川

の流れが真っ直にされたのでその氾濫も防止され、植物園の面積は40エーカー（16ha）だけ拡大されたし、植物園とヤラ川の間には、アレキサンドラ並木道が建設された¹⁰。

2. フィッツロイ庭園

1848年に設立された、面積26.1haの庭園で、これ、プラタナス、ポプラなどの大木の成長した並木道、カラフルな一年生植物の植付け、いろとりどりの花が咲くエキゾチックな低木、しだ、しゅろなどに特色がある（図3）。庭園内にはキャプテン・クックの小さな家、温室Conservatoryなどがある。また、この庭園にはポッサムという動物が住んでおり、夕方になると餌を求めて木から降りてくる（図4）植物と動物と人間が共生しているものといえる。

周囲の街路から庭園内に通ずる小道は庭園の中程にある峡谷を横切って、小さな橋に集まっている。小峡谷には池、小山、低木林があって、緑の景観がきわだっている。庭園には100種類以上の樹木がみられる。

この美しい庭園がかつてはがらくたの山であったことを示すしるしは今日ほとんどない。しかし、1860年代にはそこはねずみに荒らされ、非常に不快な場所であったので、住民はその美化を要求した。CarltonとFitzroyの庭園を設立する事業は、Edward La Trobe Batemanに委任された。Batemanは、均整、デザイン、秩序というフランス流の景観形成観念の影響を受けた。これはCarlton Gardensには適合したが、起伏の多いフィッツロイ庭園の景観には適合しなかった。そこで、新しくスコットランドからやってきた管理者のJames SinclairはBatemanのデザインを変更し、ゆるやかなカーブと林間の立地を創出したのである。Sinclairは王立植物園をデザインした植物学者のVon Muellerと同様に、オーストラリアの土地固有の青色のゴムの木を植えた。これらの木々からなる広い並木道がフィッツロイ庭園をとり囲む四つのストリートにつくられた。

Sinclairが亡くなってから、新しい管理者

図3 ビルに隣接したフィッツロイ庭園



(2001. 9. 4. 石原照敏撮影)

図4 フィッツロイ庭園のポッサム



(2001. 9. 7. 石原照敏撮影)

Bickford は木々が陰気になったので、多くの木々を取除き、ファッションと調和させて、きちんとした芝生と伝統的な花壇をつくり上げた。Sinclairの青色のゴムの木の並木道は犠牲となった。今日、庭園の縁にある花壇は、リボン状に木が植えられている。利用されている一年生植物は季節によって異なるが、さくらそう、

ベゴニア、ミネラルリア、ポリアンサスなどであろう。

メルボルンで最も有名なこれの並木道は1859年に植えられたものである。これらの堂々とした木々 それは低木の植え込みや芝生の陰になる が物理的にも、審美的にも庭園を支配している。秋になると、これの葉は芝生のうえに、金のじゅうたんを敷きつめたようになる。春と夏にはこれのグリーンの葉の濃密さは芝生のうえに、やわらかな影を落としている。冬にはその黒い幹は雨できらきら光り、その繊細な枝は冬の空にデリケートな模様をただよわせている¹¹⁾。

今日、フィッツロイ庭園は、Sinclairのビジョンをずっと保持している。1974年に、フィッツロイ庭園は、王立植物園とともに、顕著な景観の質と植物の重要性を保持したオーストラリアの最も壮大な庭園として、National Trustによって等級づけられている。

3. キングス・ドメイン Kings Domain

キングス・ドメインは、前述した王立植物園の北西側にある31.35haの庭園(図2)であり、1854年に設立された。バラエティに富んだ大木、多年生の植物、カラフルな一年生植物などによって、サウス・メルボルンの市街地に緑のうるおいを与えている。キングス・ドメインのつくられた土地は1851年から約10年つづいたゴールド・ラッシュの間、荒れ果てた木の小屋のある、ほこりにまみれた町であった(それ以前、そこにはアボリジニを征服したあとにできた小農場があった)。この町は金を見込んでオーストラリアにやってきた多数の移民を収容した。金が尽きたとき、町はとりこわされた。植民地政府は、その地域を美化しようとした。植民地政府の植物学者、Von Muellerの大きな夢が一時的であったにせよ、ここで具体化されたのである。Von Muellerは、都市の中に、家から歩いて行ける距離の範囲内に堂々たる松林をつくることを心に描いていたのである。彼はそのアイデアを驚くべきスピードで実行に移した。1861年に、

1600本の松の木が王立植物園とSt. Kilda道路との間のKings Domainの部分(図2参照)に植えられた。しかし、メルボルンに装飾用の庭園がないことを不快に思っていた当局は松林を取り除くことを命じたのである。前述したようにVon Muellerの次に、1873年に、植物園の支配人に任命されたGuifoyleは、いっそう景観保護的な計画をたてた。

第1次大戦終結後10年もたないうちに、大恐慌と失業の時代が到来した。希望を失いつつあった労働者を働かせることに必死になった植民地政府によって大景観形成計画が作成された。ヴィクトリア州総督公邸Government Houseの北側にあったボロ(ホッケーに似た馬上球技)競技場が庭園にかえられたのである。1日に1,000人以上の人がこの計画事業で働いたといわれる¹²⁾。

今日、キングス・ドメインは、庭園の縁に異例の質の高い花壇がつけられたオープンな公園である。つばき、ラベンダー、なんてんなどが庭園の縁にある花壇を形づくっている。また、多くの大木があり、そのすき間から、シティの空をのぞむことができる。何よりも、サウス・メルボルンの市街地とこの庭園とが共生していることに大きな意義があるといえる。

以上の三つの事例からみられるように、メルボルンの庭園は、メルボルンの市街地に隣接して、市街地から歩いてでも行ける範囲内に、美しい景観を配置し、人間生活にうるおいを与えることを意図して形成されていることがわかる。人間と景観との共生が成り立っているのである。もともと、庭園はメルボルンの人びとのために形成されたものであるが、今日ではメルボルン以外の人びと、とりわけ国際観光客のためにも役立っていることが重要であるといえる。

それでは、このような庭園は、いつ、どのような意味あいをもって形成されたのであろうか。このことを明らかにするために、まずその形成年代を調べてみよう。表1のように、メル

表1 庭園設立年

庭園名	設立年
Kings Domain	1854
Flagstaff Gardens	1840
Carlton Gardens	1857
Alexandra Gardens and Park	1900
Fitzloy Gardens	1848
Queen Victoria Gardens	1905
Royal Park	1851-54
Treasury Gardens	1867
Yarra Park/Flinders Park	1856
Fawkner Park	1862
Princes Park	1854
Royal Botanic Gardens	1846

資料) Lord, J., (ed.) *The Gardens of the City, The City of Melbourne*, pp. 15-48.

ボルンの主要な12庭園の設立年代をみると、1840年代は3、1850年代は5、1860年代は2、1900年代2となっており、1850年代とその前後の年代に集中していることがわかる。

これらの年代はメルボルンにとってどういう意味をもっていたのだろうか。ポート・フィリップ(メルボルン)への植民が始まったのは1835年で、メルボルンという地名も1837年に誕生した。現在のメルボルンを含むヴィクトリア州は、かつてニューサウスウェールズ州に含まれていた。そこでは1840年頃からスクォッター(大牧場主)や小農場主が活躍するようになり、彼等が生産する羊毛や酪製品の集散地・中心都市、それらを輸出する港湾都市としてのメルボルンが成長し、自治意識も高まってきた。そこで、1851年にはヴィクトリア州が誕生し、1855年には州政府が植民地政府でありながら自治権を獲得した。1851年から1861年頃までメルボルンの近くで、ゴールド・ラッシュが起こったこともメルボルンに大きな影響を及ぼした。1854年のヴィクトリア州の人口は236,798人で、そのうち、68,790人はメルボルン北方の金鉱山の鉱夫であった。

1840年代から1960年代にかけて、庭園の設立が集中していることは、この年代に、ヴィクトリア(州)の産業が発展するとともに、その中

心地メルボルンの住民の自治意識が向上し、生活の質を求める意識が高まり、住民からも当局からも、美化要求が出され、さらに住民が歩いて行ける範囲内に、意識的に、ヨーロッパの伝統を継承した、美しい景観が形成されたものと結論づけることができる。結果として、今日の言葉でいえば、景観と人間との共生が実現できたものといえよう。

むすび

メルボルンにイギリス人の植民が始まったのは1835年であり、メルボルンの庭園が設立され始める1840-60年代にはメルボルンの中心市街地（今日、シティCityと呼ぶ）の周辺に開拓されていない広大な空間が存在していた。そこに、シティに連なる市街地を形成するか（スプロール化）、市街地に隣接した庭園をつくるか（都市の中に庭園が形成される）は、住民と当局の自由意思に任されていたようなものだった。実際には、市街地に隣接して多くの庭園を形成することができたのは、何よりも当局と住民が市街地近接立地を希望したこと、メルボルンがヨーロッパの気候と同じ西岸海洋性の気候の下にあって、土地固有の植物やヨーロッパの植物と同じものを植え付け易かったことと、メルボルンに植民したイギリス系の人びとがヨーロッパ（イギリス、フランス）的な景観形成観念を継承したことによるところが大きいといえよう。

フィリップ島におけるペンギンのエコ・ツーリズムが成功したのも、イギリス系の人びとが世界的に先進的なイギリス環境保護思想を継承

したことによるところが大きいと考えられるが、このことについては実証的にフォローすることができなかった。

メルボルンの庭園も、フィリップ島のペンギンのエコ・ツーリズムも、ユニークなものであるだけに、今日、国際観光にも役立っていることは重要である。

注

- 1) 山野正彦『ドイツ景観論の形成 フンボルトを中心に』古今書院, 1998年, 17ページ。
- 2) リビエツツの経済地理学については、宮町良広の研究が注目される（宮町良広「A. リビエツツレギュラシオン理論」矢田俊文・松原宏編著『現代の経済地理学 その潮流と地域構造』ミネルヴァ書房, 2000年, 217-239ページ。
- 3) Lipietz, A., *Qu'est-ce que l'Ecologie Politique*, Edition La Découverte & Syros, 1993. (若森文子訳『政治的エコロジーとは何か』緑風出版, 2000年, 19ページ)
- 4) 同訳書, 20-21ページ。
- 5) Phillip Island Information Centre, *Phillip Island & Surrounds*, 2001, p. 2.
- 6), 7) *Ibid.*, p. 2.
- 8) 若森文子訳, 前掲訳書, 46-47ページ。
- 9) 同訳書, 55ページ。
- 10) Lord, J. (ed.), *The Gardens of the City of Melbourne*, The City of Melbourne, 1993, pp. 48-49.
- 11) *Ibid.*, pp. 28-29.
- 12) *Ibid.*, pp. 15-17.

(2001年10月30日受理)